32

居延漢簡に見る疾病と傷寒の概念

猪飼祥夫

前世紀の終わりから中国の西北探検が盛んになり、そこで木牘や竹簡などの多くの貴重な漢代資料が発見された。それらの文献は総称して「居延漢簡」と呼ばれている。居延というのは中国の西北の砂漠地帯の地名で、漢民族と北方の少数民族の争いの地であった。漢代には北方防備のために多くの兵卒が派遣されていた。その居延で発見された木簡の中に、医学にかかわる文献が含まれていた。

書かれた疾病の種類は、頭痛四節不挙(4.4A木簡番号)両脇頭痛(4.4B)心腹四節不挙(5.18)など具体的な部位をあげるものや、寒熱や傷薬などの症状がある。薬剤の形も丸薬(275.8)や膏薬(149.19)湯薬(136.40)飲薬(49.31)散(E.P.T44:53A)などがある。当然、灸(49.31)や針(159.9)の木簡もある。薬剤も、遠志・地黄(E.P.T40:191B)、細辛(149:32)大黄・半夏・桔梗(E.P.T9:7A)薑・茯苓(E.P.T9:7B)などが記録されている。飲薬に酒が用いられること(E.P.T56:228)も多い。

このような僻地においても、ある程度医療制度は整っていたらしい。まず病気にあった兵卒は侯官という上役に報告し、病卒の症状が書かれた爰書(512.27)という書類がつくられる。侯官以上のものは病書という記録(512.3)が作られる。病気のために休むもの(504.14)も記載される。薬を飲んだりして(311.6)治ればそれも報告される。薬も貯えられている(506.1)。しかし医者に見せる場合(103.47)もある。また医者を派遣するとき(E.P.T53:134)もある。今でいうなら衛生兵に当る医卒(E.P.T52:228)もいたらしい。脈診(E.P.S4:C:19)による診断が行われている。湯薬(136.40)の煮方などの木簡もある。薬量(E.P.T9:3)は十斉(剤)とか、飲酒廿斉(剤)(52.12)と書かれている。五斉(剤)を三日という期間(E.P.T51:423)もある。病癒と不癒(58.26)の記載や病死(271.23)の記載もある。これらのなかで、疾病の記載が一番多

い。疾病の名称は今日でも中国医学で通用している名前も見える。温病（7.31）頭痛寒熱（27.15）癃（59.38）傷寒（44.23）時病（101.4）心腹積（211.6）帯下病（255.17）左右脛薙（272.3）心腹丈満（293.5）肘癰腫（311.8）疾温（395.1）熱腸辟死（462.1）膝腫（E.P.T53：296A）左足癃（E.P.T54：339）などがある。さらに外傷に属するものがあり、刺腹（E.P.T43：106）創（E.P.T51：324）剣刀撃傷（E.P.T68：20）戦死（308.36）などが書かれている。

疾病のなかでは、傷寒の記載が多い。たとえば、「……傷寒、即日に頭痛煩満が加わり、未だ」（E.P.T51：201A）とか、「略……傷寒を病む、その夜、□を知らず……」（E.P.T65：292）、「泄注を病んで愈らない。乙酉に傷寒が加わり、頭痛潘（煩）満、四節が挙がらない、有書」（E.P.F22：280）など詳しく傷寒の症状を記載している。これらの木簡から、傷寒という概念が傷寒論の時代になって確立したもので無いことがわかる。すでに『素問』熱論に「それ熱病であるものは、皆傷寒の類である」とある。また『素問』刺志論に「気が盛んで身が寒であれば、これは傷寒を得たのである」とある。しかし居延の木簡に書かれた病症のほうがすでに詳しい。居延の木簡類は、前漢の中期（BC2C）から新をへて、後漢初期（AD2C）のものである。

居延漢簡の年代は、『黄帝内経』と考えられている『素問』や『霊枢』と『傷寒論』成立の中間の時代にあたる。居延漢簡は、中央から遠く離れた砂漠の中の見張り台での記録である。その中にこのような確かな医学の記録が存在することは、中国古代医学を考える上で重要な視点となると考えられる。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）